

Love's Labour's Lost の言葉について

内 山 倫 史

(1)

Love's Labour's Lost は、今世紀に入るまで、多くの批評家により、Shakespeare の最も初期の、最も未熟な作品として考えられてきた。Dr. Johnson は、その Shakespeare 論で、この作品の中に Shakespeare の天才の閃きを認めながら、「劣悪で、幼稚で、卑俗な箇所が多い」¹⁾ 点を指摘しているし、William Hazlitt も、「もし我々がこの作者の喜劇のどれか一つを手放すとしたら、それはこの一篇だ。」²⁾ と述べている。

然し20世紀になり、批評家達は、*Love's Labour's Lost* が Shakespeare の最も初期の、最も未熟な作品でなく、その筋や性格描写、又は文体の点で、後期の大作の萌芽が十分うかがえることに注目している。例えば、執筆時期に関しては、E. K. Chambers は、この作品を1594-5年、つまり *Romeo and Juliet*, *Richard II*, *A Midsummer Night's Dream* など、抒情性豊かな作品と大体同じ時期にみているし、³⁾ 筋の点では、H. Granville-Barker がその緊密な構成を、⁴⁾ 性格描写の点では、T. M. Parrott がその卓越性を激賞している。⁵⁾

このように、*Love's Labour's Lost* は毀誉褒貶さまざまな作品であるが、その美しさと魅力は、劇全体にみなぎる絢爛たる言葉の交響曲にある。この作品の生命が、筋や性格描写より言葉にかかっている点は、B. I. Evans も指摘している。⁶⁾

この小論では、*Love's Labour's Lost* の主題ともみられる言葉について考察してみたい。

(2)

Love's Labour's Lost は、その作中人物を、言葉の上で、三つのグループに分けることができる。第一のグループは、Navarre 王と三人の廷臣 (Biron, Longaville, Dumain)、及びフランス王女と三人の侍女 (Rosaline, Maria, Katharine) の宮廷人達、第二のグループは、Armado, Nathaniel, Holofernes という銜学者達、第三のグループは、Costard, Dull, Jaquenetta という田舎者達である。第一のグループは、機知に富む人達で、多種多様な言葉を用い、機知のやりとりに言葉のおもしろみがある。第二のグループは、学を銜い、ラテン語と英語をまぜたり、頭韻をやたらに使う点におかしみがあり、第三のグループは、言葉の滑稽な誤用 (malapropism) が笑いの対象となるのである。

以下、第一のグループから順を追って、夫々の言葉について考察を加えてみることにする。先づ、第一幕第一場、開幕冒頭で、三人の廷臣達に述べる Navarre 王の台詞をみてみたい。

Let fame, that all hunt after in their lives,
Live register'd upon our brazen tombs
And then grace us in the disgrace of death;

When, spite of cormorant devouring Time,⁷⁾
 The endeavour of this present breath may buy
 That honour which shall bate his scythe's keen edge
 And make us heirs of all eternity. (I. i. 1-7)

J. Isaacs は、劇のそもそもの始めを、このような子供っぽい長談義 (boyish rigmarole) で始めては、平土間の客さえ鎮めることはできないと述べているが、王のこの台詞は、語彙、イメージリー、詩のスタイルの点からも、極めて注目に値する。B. I. Evans も指摘しているように、この台詞には、「ソネット作者のリズムとイメージリーが、詩の外内におどって⁹⁾」、後に、王及び三人の廷臣達がソネット¹⁰⁾で恋文を作り、その為、劇全体が興味ある展開を示すことを考え合せると、この数行で、己にこの劇全体の基調が打ち出されるのである。

Love's Labour's Lost の魅力の一つは、又、言葉の音楽性と機知合戦 (wit combat) にあるが、これは宮廷人 Biron の次の台詞に見事にあらわれている。

King. These be the stops that hinder study quite
 And train pur intellects to vain delight.
Biron. Why all delights are vain; but that most vain,
 Which with pain purchased doth inherit pain:
 As, painfully to pore upon a book
 To seek the light of truth: while truth the while
 Doth falsely blind the eyesight of his look:
 Light seeking light doth light of light beguile:
 So, ere you find where light in darkness lies,
 Your light grows dark by losing of your eyes.
 (イタリックは筆者)(I. i. 70-79)

ここにみられる頭韻、韻脚、同じ言葉の反復等の修辭的技巧は、この台詞の音楽性に大いに寄与するとともに、又、これにより、Biron の溢るるばかりの機知もうかがえるのである。M. M. Mahood は、この台詞の中の“light”に言及して、この言葉は、機知に富んだ言葉のひらめきも、それは所詮、実質のないものだ、というこの劇の中心テーマを指し示すものである、と述べているし、Dr. Johnson も、“Light seeking light doth light of light beguile” (I. i. 77) について、「この煩わしい台詞が有する意味は、単に、余り続けて読書をすると言になる、ということにすぎず、これ程むづかしくなく、もっと言葉数も少く言える筈である。」¹²⁾と酷評している。然し、上の一行の中の四つの“light”は、夫々‘mental sight’, ‘light of truth’, ‘eye’, ‘brightness of the eye’の意味で用いられ、この意味の多様性の中に、機知合戦のおかしみが味わえるのである。“light”という言葉をもとにした機知合戦は、第五幕第二場、フランス王女の侍女 Rosaline と、Katharine の言葉のやりとり、一段と巧妙さを加えてあらわされてくる。

Ros. What's your dark meaning, mouse, of this *light* word?

Kath. A *light* condition in a beauty dark.

Ros. We need more *light* to find your meaning out.

Kath. You'll mar the *light* by taking it in snuff;
Therefore I'll darkly end the argument.

Ros. Look what you do, you do it still i' th' dark.

Kath. You weigh me not? O, that's you care not for me.

Ros. Great reason; for 'past cure is still past care.'¹³⁾

(イタリックは筆者) (V. ii. 19-29)

上の台詞の“light”の意味は、順に、‘trivial’, ‘wanton’, ‘illumination of mind’, ‘the light of a candle’ と多様を極めたもので、機知合戦の見事な見本である。つつましい宮廷人として、露骨な「浮気の」(wanton)という言葉をさけ、巧みに、“light”という言葉にげる Katherine の才知、それをうけて、「ああなたのおっしゃる意味を理解するには、もっと明りが必要だわ。」という Rosaline, 更に、“light”と“dark”のあざやかな言葉の対照——あまりの見事さに王女も、「二人とも好試合だったわ。すばらしい機知の打ち合いでしたよ。」(V. ii. 29)と感心するのである。

機知合戦に巧みな宮廷人は、更に、奇想 (conceit) に富んでいる。中でも抜きん出ているのは、Biron である。第三幕第一場の彼の台詞をみてみたい。

A woman, that is like a German clock,

Still a-repairing, ever out of frame,

And never going aright, being a watch,

But being watch'd that it may still go right! (III. i. 192-195)

恋人を“German clock”にたとえる奇想は言うに及ばず，“watch”に「時計」と「見張る」の意味をもたせ、「時計のくせに、見張っていないと、少しも役に立たない、ドイツ製の時計みたいな女」という表現は、この劇のおもしろみをいやが上にも感じさせてくれる。

C. F. E. Spurgeon は、*Love's Labour's Lost* の中にある 164 のイメージのうち、本当に詩的なものは僅か 11 しか数えず、他はすべて、不自然で持って回ったイメージである¹⁴⁾、と言っている。然し、例えば、上の“German clock”でみたように、その不自然で持って回ったイメージが、かえてこの劇では効果を収めることになっている¹⁵⁾。

ここで、機知合戦にはつきものの、「洒落に」(pun) ついても考えてみたい。H. H. Furness は、この劇に 250 を下らぬ洒落がある事を指摘しているが¹⁶⁾、*Love's Labour's Lost* は、さながら洒落で構成されているような感じがする。洒落は、必ずしも宮廷人達のグループのみに限られていないが、その数は、機知に富んだ宮廷人の言葉のやりとりにより、圧倒的に多くみられる。Dr. Johnson は、洒落は「本来貧弱な、不毛な性質のものであるにもかかわらず、彼 (シェイクスピア) にとっては、理性や穏当さや真実さを犠牲にしても、洒落さえ言えればよいという程大きな魅力をもっていた。事実、洒落は、彼がその為に世界を失い、又、失うことを惜しなかつた彼のクレパトラだった。」¹⁸⁾と酷評しているが、この劇におい

ては、洒落が劇の雰囲気をかもしだすのに、極めて重要な役割を果たしている。
一例として、第二幕第一場、Biron と Rosaline の対話をとりあげてみる。

Biron. Lady, I will commend you to mine own heart.
Ros. Pray you, do my commendations; I would be glad to see it.
Biron. I would you heard it groan.
Ros. Is the fool sick?
Biron. Sick at the heart.
Ros. Alack, let it blood.
Biron. Would that do it good?
Ros. My physic says 'ay'.
Biron. Will you prick't with your eye?
Ros. No point, with my knife.
Biron. Now, God save thy life.
Ros. And yours from long living!
Biron. I cannot stay thanksgiving. (II. i. 180-192)

この対話は、洒落——“ay”に対して、同音異義語の“eye”を用いたり、“My eye is blunt”.の意味で“No point”.と応ずる洒落——を含み、息もつかせず畳みかけられ、最後に脚韻をもつ対句で終り、美しい流動感をかもしだしている。Dover Wilson は、この劇においては、脚韻も“part of the wit”であると述べているが、¹⁹⁾機知と洒落が相俟って、言葉によるすばらしい構成美を作りあげている。

最後に、この劇における、台詞のレトリックの展開について考えてみたい。Shakespeare は、いくつかの作品において、屢々三段論法を筋の展開のために用いているが、*Love's Labour's Lost* においては、それがレトリックの展開に極めて効果的に用いられている。Sister Miriam Joseph も、この劇における三段論法の重要性を指摘している。²⁰⁾一例として、恋に悩む Biron の台詞をとりあげてみる。

Well, se thee down, sorrow! for so
they say the fool said, and so say I, and I the fool:
Well proved, wit! By the Lord, this love is as mad as
Ajax: it kills sheep; it kills me, I a sheep: (IV. iii. 4-7)

二つの三段論法を用い、殆ど単音節語を畳みかけ、恋のみを語るこの台詞、恋を Ajax にたとえる奇想、その Ajax から羊の連想、更に臆病のシンボルである羊に自分をたとえる技巧——ここに喜劇的效果が見事にあらわれている。

以上のように、第一のグループ、宮廷人達は、ソネット形式、機知合戦、奇想、洒落、三段論法等で劇の雰囲気をかもしだし、*Love's Labour's Lost* の中で、美しい言葉の交響曲を奏でている。

(3)

次に、第二のグループ、Armado, Holofernes, Nathaniel という銜学者達の言葉をみてみたい。第一のグループの宮廷人達が、あらゆる社会層の言葉を用い、それを機知縦横に駆使するのにひきかえ、このグループの連中は、「無学の奴から離れる」(V. i. 86)ことを欲し、宮廷風を装い、ラテン語や難解な言葉、持って回った表現などを常用する。それにより、かえって彼等は風刺され、この劇の喜劇的雰囲気がかもしだされるのである。

先づ、Armado の言葉からみていくことにする。彼は、王の言葉をかりれば、「頭の中でいろいろの言葉を鑄造して、自分のくだらない言葉のひびきに、まるで、美しい音楽みたいに、うっとりとなる男」(I. i. 165-168)である。彼は多音節語を好み、生かじりの外来語、むづかしい言葉を盛んに用いる傾向がある。次の台詞は、彼が王へあてた手紙である。

So it is, besieged with sabel-coloured melancholy,
I did commend the black-oppressing humour to the most
wholesome physic of thy health-giving air; and, as I am
a gentleman, betook myself to walk. The time when. About
the sixth hour; when beasts most graze, birds best peck,
and men sit down to that nourishment which is called
supper: so much for the time when. Now for the ground
which; which, I mean, I walked upon: it is ycleped thy
park. Then for the place where; where, I mean, I did
encounter that obscene and most preposterous event, that
draweth from my snow-white pen the ebon-coloured ink, which
here thou viewest, beholdest, surveyest, or seest. (I. i. 233-247)

空虚な内容を大げさな言葉で表現する Armado のこの台詞は、第二のグループの連中の言葉の典型的な見本である。“sable-coloured”, “black-oppressing”, “health-giving”等、やたらに長い形容詞を乱用したり、“preposterous”というラテン系の多音節語を使用している。更に、「ごらんになる」(viewest)という言葉一語で足りる場合に、“beholdest”, “surveyest”, “seest”という言葉をつけたしたり、又、“the time when……”以下では、古典修辞学の技巧を用いている。極めてとるにたらぬ内容を、このように古典を真似た表現をするところに、この劇のおかしみがある。

言葉を多用して、自分の表現を立派にみせようとする Armado の傾向は、次の台詞にもみられる。

Annoited, I implore so much expense of thy royal
sweet breath as will utter a brace of words. (V. ii. 23-25)

「王様」と言えばすむのに、長々と言葉をならべている。Love's Labour's Lost の劇的効果は、このような無意味な言葉の饗宴から生れるのである。

次に、Holofernes の言葉をみてみたい。彼は、諺や、ラテン語、その他奇妙な外国語を用いたり、同意語を畳みこんだりする。文法家であり、学を銜っているが、愚鈍なところがあって、これが笑いをかもしだす。彼は、Armado について、「あの人は、議論の繊維より、もっと細い言葉の糸をくりだしますからなあ。」(V. i. 18-19) と批評しているが、この言葉は、まさに彼自身にあてはまる。

先づ、学を銜う単なる文法家にすぎない彼の一面をあらわす台詞をあげてみることにする。彼は、Armado が字の綴り方をひんまげるのに言及して、次のように述べる。

……, such rackers of orthography, as to speak dout,
fine, when he should say doubt; det, when he should
pronounce debt, —d, e, b, t, not d, e, t: he clepeth
a calf, cauf; half, haulf; neighbour vocatur nebour:
neigh abbreviated ne. This is abhominable, —which he
would call abbominable: it insinuateth me of insanie:
anne intelligis, domine? to make frantic, lunatic. (V. i. 21-29)

この台詞であきらかなように、Holofernes は、普通一般の人が用いている発音を嫌悪して、学を銜った発音を好んでいる。例えば、“doubt”の発音を「ダウツト」、 “debt”を「デプト」と発音している。ここにおかしみが生れる。又、“clepeth a calf, cauf”という表現では、頭韻の面白さはいうまでもなく、“clepeth”という古い言葉を用いたため、一層おかしみが高められている。

頭韻のことをいえば、彼は、第四幕第二場で、Nathaniel に、「少し頭韻を使いますよ。その方がすらすらいきますから。」(IV. ii. 56) と述べ、次のようにやってのける。

The preyful princess pierced and prick'd
a pretty pleasing pricket. (IV. ii. 57)

ここにみられる非常に技巧的でわざとらしい頭韻は、宮廷人の極めて機知に富んださりとした頭韻とは対照的である。Holofernes のこの台詩には、頭韻多用に対する風刺がみられるが、言葉の面白味の点から、かえってこの劇の喜劇的な雰囲気が高められている。

Armado が、同意語を畳みこむことは、已にみてきたが、Holofernes についても同様である。一例をあげてみよう。

The deer was, as you know, sanguis, in blood; ripe
as the pomewater, who now hangeth like a jewel in the
ear of caelo, the sky, the welkin, the heaven; and anon
falleth like a crab on the face of terra, the soil, the
land, the earth. (IV. ii. 3-7)

ベダンチックな Holofernes は、同義語の反復に、“sanguis”, “caelo”, “terra” などのラテ

ン語を用い、空虚な内容をもったいぶったものにみせ、この喜劇独自の世界をきづきあげている。

最後に、Nathaniel についてみてみたい。Nathaniel も言葉を弄ぶ人間であるが、学をひけらかすあまり、ラテン語の規則を破った表現をする。他の二人と同じく、同意語を畳みこむこともする。²⁵⁾ 彼は一つの表現だけでは満足せず、知っている限りの気取った言葉を用いようとする。

第五幕第一場、彼が Holofernes の演説を批評した台詞をとりあげてみよう。

Your reasons at dinner have been sharp and sententious:
pleasant without scurrity, witty without affection,
audacious without impudency, learned without opinion,
and strange without heresy. (V. i. 2-5)

この台詞には、対照法や頭韻を用いて美辞麗句を連ねた Nathaniel の文体に対する風刺が、歴然とうかがえる。と同時に、この文体が、銜学者 Holofernes を批評するのに用いられていることが、一層、この劇のおかしみを増すのである。

以上考察を加えてきたように、第二のグループは、ラテン語やラテン系の英語、頭韻、美辞麗句等をひんばんに用い、とるにたらぬ内容を、大げさな言葉で表現しているが、そのため、かえって、この劇に笑いを生み出し、喜劇の世界を作りあげていくのである。G. Gordon は、「喜劇は、よく仕組まれた冗談である。」と述べているが、喜劇の一面は、又、以上のようによく仕組まれた言葉の饗宴にもある、と言いうるであろう。

(4)

第三のグループは田舎者達で、方言をしゃべり、平明な言葉を用いる。然し、彼等は、第一、第二のグループの人達の影響を言葉の上でうけ、言葉の滑稽な間違い (malapropism) をする。ここに喜劇的効果が生み出される。

Jacquenetta は、最も口数の少い女で、言葉の面でとりあげるべきものがない。

Costard は田舎者であるが、機知に富んでいる。然し、無学であるため、言葉の上で奇妙な間違いをおかし、そこにおかしみが生れる。

先づ、第一幕第一場、警保官 Dull に捕えられた Costard が、王の前で事情を説明する台詞をみてみることにする。

In manner and form following, sir; all those three:
I was seen with her in the manor-house, sitting
with her upon the form, and taken following her
into the park; which, put together, is in manner
and form following. Now, sin, for the manner — it
is the manner of a man to speak to a woman. For
the fomr — in some form. (I. i. 207-213)

この台詞において、“manner”, “form”, “following” という言葉を自由に駆使する Costard の機知のひらめきは、第一のグループの Biron に劣らない程である。然し、彼は無学のため、公文書で用いられる定った言い方 “In manner and form following” の意味を少しも理解せずに用いている。“manner” を、発音が同じの “manor” の意に、“form” を “bench” の意に、“following” を “courting” の意にとっている。その結果、日常茶飯事の内容が、勿体ぶった法律用語で語られることになり、そこに笑いが生じるのである。

又、第三幕第一場における Costard の次の台詞をみてみよう。

Now will I look to his remuneration. Remuneration!
 O! that's the Latin word for three farthings; three
 farthings, remuneration. 'What's the price of this
 inkle?' 'One penny'. 'No. I'll give you a remuneration:'
 why, it carries it. Remuneration! why, it is a fairer
 name than French crown. I will never buy and sell
 out of this word. (III. i. 131-142)

これは、Jaquenetta に手紙を渡す報酬として、Costard が、Armado からお金を受けとった時の台詞である。Armado は、彼に、「これが報酬だ。」(This is remuneration.) と言ってお金を渡すが、無学の Costard には、“remuneration” というラテン語からきた言葉がわからない。彼は “remuneration” を「三フェージング」の意味に誤解し、しかもこの気取った言葉を繰りかえし用いることにより、この場面に笑いをひきだしている。Sister Miriam Joseph は、ラテン語から新しい言葉を作り出すことは、修辞学における “vice” であり、Shakespeare はそれによって、“inkhornism” を風刺していると述べているが、²⁷⁾ この台詞は、第一のグループの宮廷人の言葉遣いによって、田舎の単純素朴さが毒されていくのを、風刺していると考えてもいいだろう。

伝統的な、のろまのタイプである警保官の Dull は、その名の如くのろまである。Nathaniel の言葉をかりれば、「鈍重な部分だけに感覚が働く動物にすぎない」(IV. ii. 27-28) 男である。彼は無学のため、冗語を用いたり、屢々滑稽な言葉の間違いをする。例えば、第一幕第一場、逮捕した costard をつれて登場する Dull は、Navarre 王に次のように言う。

I myself *reprehend* his own person, for
 I am his grace's tharborough: but I would
 see his own person in *flesh and blood*.

(イタリックは筆者) (I. i. 184-186)

“his own person” ですむところを、“flesh and blood” と余計な言葉を使ったり、“represent” (代表する) のつもりで、“reprehend” (とがめる) と言葉を間違え、そのため、「王をとがめる」という滑稽な意味になってしまう。又、第四幕第二場、Holofernes が、“haudo credo (私は信ずることができない) (IV. ii. 11) と言うのを聞いて、“credo” の

“do” という音から、その言葉を “doe” (雌鹿) の一種の意味にとったりする。更にすぐれた例は、次の対話にみられる。

Hol. The moon was a month old when Adam was no more,
And raught not to five weeks when he came to five-score.
The *allusion* holds in the exchange.

Dull. 'Tis true indeed; the *collusion* holds in the exchange

Hol. God comfort thy capacity! I say, the *allusion* holds in the exchange.

Dull. And I say, the *pollusion* holds in the exchange;

(イタリックは筆者) (IV. ii. 40-46)

Dull は、Holofernes のラテン系の “allusion” (風喩) というむづかしい言葉が理解できないし、又、“in the exchange” (交換しても) の “exchange” を、「取引所」の意味にとってしまう。そのため、Holofernes の気取った表現が、「あやしげなこと (collusion) が、取引所で通用する。」、「けがらわしいことが (pollusion), 取引所で通用する。」という極めて次元の低い表現におきかえられ、ここに笑いかもしだされる。更に、この台詞が、警保官たる Dull によってのべられるため、一層おかしみが生みだされることも、注目してよいであろう。

上述のように、第三のグループの言葉の特徴は、それを使う連中が無学のため、相手の言葉の意味を全然理解せずに真似て使うか、滑稽なはきちがいをする点にあるが、ここから笑いや風刺が生れ、喜劇の世界がくりひろげられるのである。

(5)

以上考察を加えたように、*Love's Labour's Lost* は言葉の饗宴の上になりたつ喜劇である。機知を弄する宮廷人、大げさな言葉を使う術学者、滑稽な言葉の間違いをくりかへす田舎者——この連中が、言葉を縦横に駆使してこの劇は展開する。然し、彼等が極端に言葉をもてあそぶことが、かえってその内容を空虚なものにして、それが到るところで風刺されている。

例えば宮廷人についていえば、フランス王女は、Navarre 王の恋文について、次のように述べている。

as much love in rhyme

As would be cramm'd up in a sheet of paper,

Writ o' both sides the leaf, margent and all,

That he was fain to seal on Cupid's name.

(V. ii. 6-9)

Rosaline も、Biron の恋文について、「もし詩の内容も本当だとすれば、私はこの世で一番美しい女神ということになりますわ。」(V. ii. 35-36) と言っているし、Maria も、Longaville の手紙を、「半マイルだけ長すぎるわ。」(V. ii. 54) と皮肉っている。

術学者や田舎者の言葉が、宮廷人にもまして風刺されているのは、上に見てきた通りである。

この空虚な言葉の実体に、最初にきづくのが Biron である。それは、第四幕第二場、フランス王女の一行に、正体を見破られた時の彼の台詞にみられる：

O, never will trust to speeches penn'd
 Nor to the motion of a school-boy's tongue,
 Nor never come in vizard to my friend,
 Nor woo in rhyme, like a blind harper's song.
 Taffeta phrases, sicken terms precise,
 Three-piled hyperboles, spruce
 Figures pedantical……
 Henceforth my wooing mind shall be express'd
 In russet yeas and honest kersey noes. (V. ii. 402-413)

これは更に、第五幕第二場で、一段とはっきりする。父の死の知らせをうけたフランス王女が帰国しようとするのを、Navarre 王がとめようとするが、王の言葉があまりにも比喩にみちているので、フランス王女には理解できない。その言葉を聞いた Biron は、すかさず、「悲しみの耳には率直な言葉 (honest plain words) が、一番よく入るものです。」(V. ii. 763) と言う。これこそ、第一、第二、第三のグループの人達の心を代弁したものではなからうか。

注

- 1) W. Raleigh (ed.) *Johnson on Shakespeare* (Oxford, 1965) p. 89.
- 2) W. Hazlitt: *Characters of Shakespeare's Plays* (World's Classics) p. 241.
- 3) E. K. Chambers: *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems* (Oxford, 1963) Vol. 1, p. 270.
- 4) H. Granville-Barker: *Prefaces to Shakespeare* (Princeton, 1959) pp. 428-435.
- 5) T. M. Parrott: *Shakespearean Comedy* (New York, 1962) p. 123. で次のように述べている。"It is especially in the field of characterization that *Love's Labour's Lost* surpasses both in variety and distinction the other comedies of the prentice period".
- 6) B. I. Evans: *The Language of Shakespeare's Plays* (London, 1952) p. 1.
- 7) J. Issacs: "Shakespeare as Man of the Theatre", in *Shakespeare Criticism 1919-1935*, ed. Anne Ridler (Oxford, 1956), pp. 317-8.
- 8) Sonnet 19 に, "Devouring Time,……" がある。
- 9) B. I. Evans: *op. cit.*, p. 4.
- 10) Mark Van Doren も, "The King of Navarre's opening lines, addressed to the three young lords who are to keep him company in his studies, like most of Shakespeare's opening lines confess the nature of the play to come". と述べている。(Shakespeare, A Doubleday Anchor Book, 1953, p. 46.)

- 11) M. M. Mahood: *Shakespeare's Wordplay* (London, 1957) p. 175.
- 12) *Johnson on Shakespeare, op. cit.*, p. 86.
- 13) Tillyard は、この箇所を次のように paraphrase している。
 'Ros. What's the hidden meaning of your trivial remark? Kath. A wanton disposition in a dark beauty. Ros. More information is needed to establish your meaning. Kath. As you can spoil the light of a candle by sniffing it badly, so you will obscure an intended meaning by getting annoyed. Therefore I will let the argument lapse into obscurity. Ros. Yes indeed, obscurity is much to the point in your case: when you misbehave with a man, always see that you keep it secret. Kath. A Superfluous precaution for you, for all know the precarious state of *your* morals. Ros. If I'm light, it is because I'm slimmer and weight less than you. Kath. Your words can just as well mean you don't regard me. Ros. Quite right, if there is truth in the proverb about "caring and curing". (*Shakespeare's Early Comedies*, London, 1965, pp. 154-155)
- 14) Caroline F. E. Spurgeon: *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us* (London, 1935), p. 275.
- 15) 第四幕第三場の、恋愛についての Biron の台詞は、これの見事な例である。

Love's feeling is more soft and sensible
 Than are the tender horns of cockled snails;
 Love's tongue proves dainty Bacchus gross in taste;
 For valour, is not Love a Hercules,
 Still climbing trees in the Hesperides?
 Subtle as Sphinx; as sweet and musical
 As bright Appollo's lute, strung with his hair;
 And when Love speaks, the voice of all the gods
 Make heaven drowsy with the harmony. (IV. iii. 337)

恋の感覚を、蝸牛の軟角にたとえる奇想、Bacchus, Hercules, Hesperides, Sphinx 等の固有名詞は、Biron の言葉の通り、「アポロの神の琵琶」の音のように、美しい言葉の交響曲を奏でる。

- 16) H. H. Furness (ed.) *Love's Labour's Lost* (A New Variorum Edition) (Philadelphia, 1904), pp. 375-777.
- 17) 例えば、第二のグループの Holofernes の次の洒落は、字を銜ううきらいがあり、第一のグループの洒落のように自然にでてこない。

Master Person, quasi per-son. And if one should
 be pierc'd, which is the one? (IV. ii. 85-86)

(Person と per-son, 及び per-son と pierc'd……one の洒落。)

- 18) *Johnson on Shakespeare, op. cit.*, pp. 23-24.
- 19) J. Dover Wilson: *Shakespeare's Happy Comedies* (London, 1966) p. 176.
- 20) Sister Miriam Joseph: *Shakespeare's Use of the Arts of Language* (New York and London, 1966) p. 176. なお、三段論法では、誓を破る Longaville の "Vows are but breath, and breath a vapour is…… (IV. iii. 68-73) は、ソネット形式でのべられている点、注目に値する。

- 21) Armado は言葉のたたみこみが得意で、第三幕第一場、Costard との対話で次のように述べている。
- “By my sweet soul, I mean setting thee at liberty,
 enfreedoming thy person: thou wert immured, restrained,
 captivated, bound.” (III. i. 125-126)
- 22) Sister Miriam Joseph は、ここの箇所について、“Apparently Armado had carefully conned a lesson in rhetoric similar in content to Thomas Wilson’s summary in verse for ready memorizing as an aid to invention”. と述べている。(op. cit. p. 122)
- 23) 第四幕第三場の Holofernes と Nathaniel の会話には、ラテン語、ラテン系の言葉が頻出し、この喜劇の世界を作りあげている。
- 24) *Nath.* Laus Deo, bene intelligo.
Hol. Bon, bon, fort bon! (V. i. 30-31)
- 25) Dull の質問に答える Nathaniel の次の台詞にみられる。“A title to Phoebe, to Luna, to the moon.” (IV. ii. 48)
- 26) G. Gordon: *Shakespearian Comedy and Other Studies* (Oxford, 1953) p. 36.
- 27) Sister Miriam Joseph: op. cit. p. 72.
- 28) 第五幕第二場 749行から761行にわたる Navarre 王の台詞。